

野田宇太郎 文学散歩

第6卷

文一総合出版

著者略歴 明治42（1909）年，福岡県三井郡に生まれる。中学卒業後，詩作に入り，上京して出版界で『文藝』『藝林間歩』等を編集。戦後，『新東京文学散歩』に続いて一連の文学散歩を発表。昭和52年（1977）年，明治村賞を受賞。全詩集『夜の蜩』『日本耽美派の誕生』『日本の旅路』など，文学散歩のほか，詩集・近代文学研究・評論・随筆集などに多数の著書がある。

野田宇太郎文学散歩 6

東京文学散歩 武蔵野篇 上

昭和52年 7月10日 初版第1刷発行

著 者 野田宇太郎

発行者 佐藤 弘一

発行所 株式会社 文一総合出版 東京都千代田区神田神保町1-32
電話東京(291)8049 振替東京2-42149

©1977 0395-90106-7354
定価は，函・帯に表示してあります。

印刷・製本 奥村印刷

目次

世田谷界限

武蔵野の行方

二

和田堀廟所

六

九條武子の墓

佃島祖先由来の碑

樋口一葉の墓

蘆花恒春園

三

甲州街道

恒春団と蘆花公園

「粕谷健次郎」の生活

母

屋と書院

鉞傷

美的百姓

『寄生木』とわかれの杉

墓 「天皇陛下に願ひ奉る」

「謀叛論」の道

松陰神社附近

八

思い出すこと

七

葛西善藏終焉の地

七

世田谷の檻樓市

二八

北原白秋と世田谷

二三

烏山寺町

二九

喜多川歌麿の墓
榎本東順と其角の墓
爲永春水の墓

中央線に沿うて

甲武鉄道

「杉並村」の詩と阿佐谷

北原白秋終焉の家

黄眠艸堂

鐵幹・晶子終焉の地

原民喜の死

井の頭と野口雨情

三木露風と武蔵野

牟礼に眠る詩人

遠霞荘

万助橋と太宰治の死

二三

二人の名誉市民

三〇

終の栖

三五

「花吹雪」と「懇親会」

四九

太宰治の墓と桜桃忌

五四

鷗外墓の武蔵野移葬

五七

展墓文学

六五

森林太郎遺言の碑

七五

森家一族の墓

八九

玉川上水に沿うて

五日市街道と織田一磨

九九

吉祥寺の櫓並木で

一〇四

國木田獨歩と武蔵野

三三

「武蔵野」の碑

三〇

獨歩の林

三〇

境停車場

三二

獨歩の「武蔵野」執筆まで

三四

玉川上水

三八

小金井橋

三九

小さな武蔵野

四〇

武蔵野幻想

四二

『次郎物語』と浴恩館

四六

東京文学散歩 武蔵野篇上 おぼえがき

『東京文学散歩武蔵野篇』は先ず「新武蔵野文学散歩」の標題で全国市長会雑誌「市政」に昭和四十七年八月号から昭和五十年七月号まで満三年、三十六回に亘って連載し、それに加筆補正をほどこしたほか、書き下ろしを加えて昭和五十一年に脱稿した。本書はその上巻で、東京区内の杉並、世田谷から武蔵野市、三鷹市、小金井市の地域である。

(著者)

東京文学散歩

武蔵野篇 上

世田谷界限

武蔵野の行方

昔の武蔵国の地域は、現代の東京都と埼玉県全域、及び多摩川流域の神奈川県の一部に分割されている。そのうち武蔵野と呼ばれた原野の大部分が含まれているのは東京都と埼玉県の一部だが、久しぶりに新しい地図をひらいてみて、わたくしは思わず息を呑んだ。古代から日本人の心の拠り所ともなってきた豊かな自然を抱く武蔵野の大部分は、今や東京を中核とする一大メガロポリスに変貌しつつあるからだ。東京二十三区以外の「市」となっている人口三万以上の都市を数えてみると、昭和四十七年七月現在で東京都は二十六、埼玉県は三十七である。それに神奈川県横浜市、川崎市などを加えた六十五都市によって、嘗ての武蔵国は埋め尽くされようとしている。過去に戦争もなく敗戦もなく、平和な日本のために日本人自身の叡智によって、はじめから計画された設計ならまだしも、それが利欲に血迷った政治家や企業家の、目的のためには手段を選ばぬ経済優先による変革であつたら、都市化はそのまま自然破壊となり、人間の生活環境剝奪ともなる。武蔵野はどこへ行つたの

だろうか。——ふとそんな不安が心をかすめる。

その不安と驚きはまた、わたくしに『新東京文学散歩』を書きはじめた昭和二十五年十一月のころを、まざまざと思い出させた。

わたくしの前にはさながら不安の地図のような東京の焼け跡が、まだ廃墟のままあちこちにひろがっていた。敗戦という有史以来の日本の大変革に直面し、明日のことさえわからぬような時点に立って、一人の文学者として何を為すべきかを考えた。焼けはてた過去とはいえ、そこには人間がいる。学恩ある先人たちの生活もある。だが、そこを教える地図もなければ道しるべもない。自分で道しるべを作り、地図を作ろうとして、とりあえずわたくしは文学散歩と名づけた。そして東京に新の字を加え『新東京文学散歩』と題したのが、このようなわたくしの新しい仕事のはじまりでもあった。

あれから早くも二十二年が過ぎようとしている。しかし武蔵野の踏査を記録することは『新東京文学散歩』を書きはじめたころからのわたくしの宿題であった。それは昔の『江戸名所図会』二十巻が江戸と題しながら、武蔵野の大部分を収めているのにも似ているが、『江戸名所図会』の著者たち（齋藤幸雄、幸孝、幸成の神田の名主三代）は、江戸もまた武蔵野とした古来の考え方によっていたからであつたらう。しかし近代では東京（江戸）は都会、武蔵野その他旧武蔵国は自然のゆたかな地方と、截然とした区別が必要である。東京の記録を充実させてゆくうちに歳月は流れ、東京の都市改造と共に武蔵野は津波のような都市化に襲われはじめた。そのために二十二年間、わたくしは手を拱いて傍観していたわけではない。つねにその激しい変革の中に佇ちつづけていたと云ってよい。武蔵野

の自然を奪いつつある東京メカロポリスの新道路はまだ土になじまないまでも、コンクリートだけは固まりかけてきた今日この頃である。

この武蔵野の姿貌は、その歴史的な自然を中心に考えるとき、思わず息を呑むほど、まさに異常である。はたしてどこにどれだけ武蔵野は生きているだろうか。その不安は不安として、わたくしはようやく武蔵野に足向けるところにした。嘗て東京の焼土に立ったときと同様、心の中では武蔵野に新の字を加えたい気持ちでもある。

さて、武蔵野とは一体どこを指す名だろうか。これが先ず出発に当ってのわたくしの設問である。

武蔵国を前提とすれば武蔵野はその国の平野ということになる。だが武蔵という語源は古く朝鮮語や蝦夷語説もあっていまだに明らかでない以上、たとえば吉田東伍の『大日本地名辞書』の「是れ当国（註・武蔵国）の平野の謂ひなれど、本来は国名却て野名に出てしやも知るべからず」という説を見逃すことは出来ない。武蔵野については様々な解釈がおこなわれてきたが、それらが一致しているのは武蔵国の平野全体とせず、限られた部分とされていることである。たとえば『江戸名所図会』巻の三には「武蔵野」について「南は多磨川、北は荒川、東は隅田川、西は大岳、秩父根を限りとして（中略）草より出で、草に入る、又草の枕に旅寝の日数を忘れ、問ふべき里の遙かなりなど、代々の歌人袂をしぼりしが、御入国（註・徳川家康の江戸開府）の頃より、昔に引きかへ、十万户の炊煙紫霞と共に棚引き、僅かにその旧跡の残りたりしも、承応より享保に至り四度まで新田開発ありて耕田林園となり、往古の風光これなし。されど月夜狭山（註・現在の東京と埼玉境界の丘陵地帯を指す）に登り

て四隣を顧望するときは、曠野蒼茫千里無^{きりまりなし}限。往古の状を想像するにたれり。」と江戸後期の有様を記している。ここで武蔵野とされた十郡のうち、多磨、荏原、豊島、及び足立の半ばは現在の東京都、多摩川下流南岸の橋^{たかはし}樹、都筑は神奈川県、他はすべて埼玉県である。

このように武蔵国とは別に武蔵野が云い伝えられ、武蔵国が地図上から消え去った今日でもなお武蔵野の名が残っているのは、むしろ歌枕としてである。古歌にあらわれた武蔵野も『万葉集』の頃は、「武蔵野の小岫^{せう}が雉立^{きざり}ち別れ去^いにし宵より夫^せろに逢はなふよ」「恋しけば袖も振らむを武蔵野のうけらが花の色に出なゆめ」「武蔵野の草は諸向きかもかくも君がまにまに吾は寄りにしを」「わが背子を何^{なん}どかも言はむ武蔵野のうけらが花の時無きものを」などがあって、何れも武蔵野と具体的な結びつきが感じられる恋歌である。それが平安前期の『古今集』になると、万葉のいわゆる「ますらをぶり」に対して「たわやめぶり」といわれるようにいくらか知的にみがかれて、たとえば「紫のひとととゆゑにむさし野の草はみながらあはれとぞみる」のような感覚的で繊細な恋歌になり、また鎌倉期以後になると、『新古今集』の「行末は空もひとつの武蔵野に草の原より出づる月かげ」（摂政太政大臣藤原良經）や『続古今集』の「むさしのは月の入るべき山もなし尾花が末にかゝる白雲」（大納言藤原道方）のように観念化されて、武蔵野はただ歌枕にすぎなくなつてゆく。歌の優劣は別にして、そこには明らかに東国の武蔵野が東国を知らぬ京の殿上人にとつても、日本人の心情の、自然の典型となつて行つた時代の推移が伺われる。

このように武蔵野は詩歌において古典の風土となり、その後の血なまぐさい武蔵国の歴史からも遊